

ポンティアナ訪問記 (その2)*

山中 大学**

1988年10月2～6日、インドネシア共和国西カリマンタン州の主都ポンティアナ市郊外のジャングル内に設定されている、赤道大型レーダー建設予定地を訪問した。先に1987年7月に住氏らが訪問された際の報告が、既に本誌1987年11月号(34巻723頁)にあり***、赤道レーダー建設計画の概要等についてはこれを参照されたい。住氏らの調査は乾季に行われたが、今回は雨季(赤道域特有の半年周期卓越により、春および秋に雨季がある)を調査し、両者を合わせて土木工事等の feasibility を判断するのが目的であった。詳細な検討は現在行っている途中であるため、以下には前回の報告に述べられていない事柄についての印象のみを簡単に記しておく。

到着した日の午後、雲も高く天気も良かったので、インドネシア側(LAPAN)の担当者らの案内で直ちに現地へ赴いた。先に建設された道路は市に近い一部は舗装されており、比較的楽に建設予定地の直前までは行くことができた。しかし、この楽観は予定地にかかるや否や見事に碎かれ、未舗装の道路には轍が深く刻まれて水溜りが転々とできており、運転する1人以外は車を降りて徒歩で進むことにした。予定地では9月下旬から、LAPANの指導する測量隊が、胸まで水につかったり、雨の中でも早朝から夕暮れまで、等々の悪戦苦闘をしながら、土地の起伏を調査中であつた。しかし、道路の両側は水浸しで(写真1)、咬まれると確実に数分であの世行きという green snake も出るというので、結局今回は筆者らはジャングルの奥へは入り込めなかった。到着第1日の視察では、道路沿いに歩いて、植物の伸び具合や道路そのものの状況を眺めた。写真2は、住氏の報告の写真1にある観測小屋の跡であるが、特に一旦伐採し

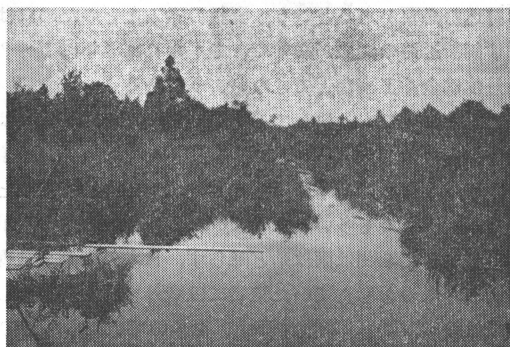


写真 1

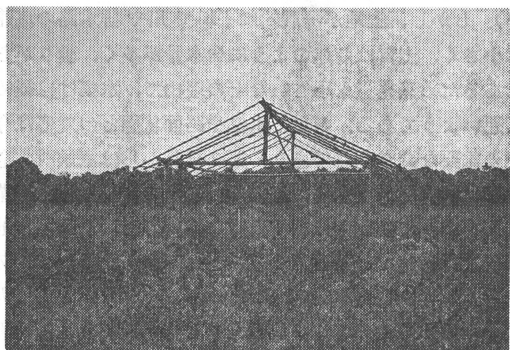


写真 2

た植物が1年で背丈位に成長していることに注目された。

第1日目の夕暮れが迫る頃、我々をゆっくりと追いかけて来た車が水溜りにはまり込み動かなくなったため、引返して全員泥だらけで車を押し出した。来た道を引き返すより、向こう側の集落の道へ出た方が良いとの判断で、既にとつぷりと暮れた暗闇の中を前進したが、行けども行けども水溜りの連続。路面が乾いて来たので一同車に乗込んで走れば、少し行った先でパンクしてしまい、この時には野営も覚悟した。暫くは筆者のライターの火を頼りに(懐中電燈すら持って来なかったのはうか

* Impressions at Pontianak: Part 2.

** Menabu D. Yamanaka, 山口大学教育学部.

*** 住氏の報告の標題では「ポンティアナック」となっているが、インドネシア標準語では語尾の k は無声音とされており、現地の人々の発音でも全然聞き取れないので、ここではそれらに従って表記を改めた。

つだった), かなり心細いジャッキを使ってゴソゴソしていたが, 暫くして遠くからランプが揺れながら近づいて来た時は, 本当に天の助けだと思った. この住民の親切のお蔭で筆者らは夜9時ではあったが, とにかくホテルに帰り着いて腹一杯食事をとることができた. 以上の状況から, 雨季のジャングル地帯の土壌の悪さが想像して頂けよう. 種々の情報から総合すると, しっかりと建物を立てるには, 地下40m位の支持層まで届くパイルを打込む必要があるという. 資材の搬入などのためにはまず舗装道路の建設が必要で, さもなくば半年に1~2カ月位は全く工事などできないようである.

雨季と言っても, 決してのべつ雨が降っている訳ではない. 本年は世界の他の地域と同様に当地も異常気象で, 平年ならまだ乾季のはずの8月に雨が良く降ったというが, それでも多い日で数10mmの程度である. 筆者の滞在した期間は雨は殆ど降らず, 日本の梅雨や秋霖のようなものを考えていた筆者には意外であった. 但し雲量は多く, 30°Cを越す日中に出歩いている, 余り日焼けはしなかった(尤も筆者はこの夏1カ月間鹿児島で日焼けしていたので, 参考にはならないかもしれない). しかし, 土地が一義的に平坦で川や排水路の流速は小さく, 土質は前述のように含水量が多く, 曇りがちであるため蒸発量も小さいなどの理由で, 水捌けは極めて悪いようである. 雨量と水位や路面状態との対応は今後の重要な調査項目であり, 第2日目からは測候所, 道路局, 港湾局, 土木局, 電力局, 陸軍局, 現地土木企業などを回って必要な資料や情報を取得した. また予定地で現在行われている測量の基準を確認するため, カプアス・ランダク川(Sungai Kapuas-Landak)にかかる大橋の水面からの高さを実測したりした. 最終日, 飛行場へ向う前にも予定地を見たが, 好天により水も少しは引いたものの, やはり筆者がジャングルへ入れる状況ではなかった.

今回は研究者として日本から来たのは筆者一人であったが, 住氏のいうような孤独感は一切感じなかった. 観測には文明圏外がつきものであり, 若干失礼な言い方ではあるが陸の孤島に近い三陸や内之浦に比べて, 州都ポンティアナの中心(山口市にあるのよりも品数の豊富なスーパーもある)の目と鼻の先にあるのは恵まれていると思った. LAPANの担当者や情報収集先の幹部クラスにはジャワ人もおり, 「こんな田舎は嫌だ, 早く帰りたい

い」という者もいたので, こちらが逆に「そういう根性ではまず観測はできっこないね」という始末だった. 色々と助言をもらってから来て十分に注意したせいか, 腹の調子も至って快調でパダン料理も十分に満喫できた. 現地出身者を含むLAPANの若手は, 筆者が山口で相手している所謂「新人類」の学生諸君に爪の垢を煎じて飲ませてやりたい位, 非常に誠実かつ熱心である. 観測を志す人間にとって, この誠実さと熱心さは, 単なる才能や体力以上に必要不可欠であると筆者は考えている. 東アジアでは大なり小なり幅を利かす「年功序列」や, 高等教育を受けた者が足りない弊害などが少しでも除かれ, 彼らが存分に勉強する機会が与えられたなら, 必ずここにも新しい大気科学の芽が育つであろうと確信した.

なお, 今回は現地土木業者の情報を頼りにポンティアナの特別市域(Kota madya)外も調査し, 約100km北方のサンバス(Sambus)県の県都シンカワン(Singkawang)まで足を延ばした. そこはもう一山越えればマレーシア領サラワク州という所である. 特にシンカワン周辺は明の鄭和(1371~1434)以来の中国人開拓地(ポンティアナの起源もそうらしい)の佇いを濃厚に残しており, モスクや教会の間に極彩色の儒教の聖堂が立っている. 水を巡らしたマレー人的住居とは打って変わり, 日本にもあるような田園風景と農家があり, 日本的に見てかなりの美人が町を歩いており, 不思議な感動を覚えた. しかしながら, 実はこの近くには敗走する日本軍が万の柙に上る人々を虐殺した収容所の跡があると現地人に教えられ, 自分の不勉強を取じると共に, 今後自分のできる形で償いをしたいと心に誓った. 自分のできる形とは, 赤道レーダーを決して日本や先進国のみの道具とせず, インドネシアを含むアジア諸国で運営する国際大気科学センターとする努力である. そのためにもやはり, まず現地の若手を研究者・技術者として本気で育てる必要があろう. 全地球的に満遍なく観測が展開できてこそ大気科学は可能になるのであるから, この努力は大気科学にとっても必ずや大きな前進に繋がると信じている.

文末に当たり, 前回に引き続き奨学金寄付金の御援助を賜った日産科学振興財団, 並びにこの貴重な機会と種々の助言を筆者に下さった京大超高層電波研の方々に, 深く御礼申上げる次第である.